

編集後記

『人間学研究』第11号が、刊行の予定時期より大きく遅れてではありますが、皆さまの手元に届くこととなりました。原稿を執筆いただいた方々、査読をご担当くださった方々に、この場を借りてお礼申し上げます。

今号ではたまた私が編集長という役をいただいたものの、これはほとんど名目的なものです。実際には、人間学研究所の運営実務を担当されている立石尚史氏が、雑誌刊行のための苦労をほぼ一手に引き受けて下さいました。これについて、感謝の気持ちを立石氏に申し述べたいと思います。——と、これで話を終わらせては、私の貢献するところが何も無く、余りに心苦しい気がするので、余談を一つ加えておきます。

本誌のタイトルにも含まれている「人間(にんげん)」という語についてです。この語は、現代ではもっぱら「ひと」(英語でいう human being)の意味で用いられます。しかし、ひとを表すのに、ただ「人(にん)」の字だけでなく「間(けん)」を付けるのには、どんな理由があるのでしょうか。いくつかの辞書を頼りに、その来歴を調べてみると、「人間」はどうやら、もともと漢訳仏典の用語であったようです。

例えば、『法華経』の法師品には「愍衆生故 生此人間」(衆生をあわれむために、[悟りの世界から] この人間に生まれた)という一文があります。ここでの「人間」は、サンスクリット原典にある *manuṣya*、つまり *manuṣya*- (人) の複数・処格形の漢訳です。従って、「人々の間(に)」と、全く字義どおりに理解して良い用例です。『信長公記』に引かれた謡曲『敦盛』の一節「人間五十年 下天のうをくらぶれば 夢幻のごとくなり」にある「人間」の語も、法華経と同じく「人々の間」つまり「人間界」を指しています。人間界の五十年は、天界の底辺部である下天では一昼夜にしかないという話で、これは仏教論書『俱舍論』第十一の「人間五十年 下天一昼夜」を下敷きにしたものです。

このように、もともと「人々の間」という空間を指した「人間」という語を、「人」の意味で用いるようになったのは、日本の平安時代あたりのようです。例えば、『今昔物語集』巻五の三に「天人は目瞬(まじろ)かず 人間は目瞬(まじろ)く」(天人はまばたきをせず、人はまばたきする)というパッセージが見えます。これは、天人(divine being)と対比され、しかもまばたきをする主体ですから、明らかに人(human being)を指す用例です。なぜこうした語義の発展が起きたのか、国語学者でない私にはよく分かりません。

ただし「人間」という語が、まず初めに「天界」や「天人」といった、私たち人とは異なるものと比べて使われていたことは、意義深いように思えます。つまり、原意としての「人間」には、私たちが普段沿っている常識や習慣を、異世界への想像を通して相対化する意識が含まれているのです。

さて、今号の刊行の遅れも、下天界でいえば一昼夜の50分の1、つまりは約29分程度……。と、つまらない言い訳で締めくくるとともに、皆様のご寛恕を願う次第です。

手嶋 英貴

編集委員

委員長：手嶋 英貴

編集委員：秋田 巖、高石 浩一、中窪 靖、
永澤 哲、橋本 和也、潘 宏立

編集事務：立石 尚史

京都文教大学人間学研究所紀要 第十一号

2011年3月29日 印刷

2011年3月31日 発行

編集・発行 京都文教大学人間学研究所

〒611-0041 宇治市横島町千足80

☎0774-25-2891

印刷 (株) 栄文堂